

## サイコドラマと私：偶然の出会いが必然に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯田, 雄二郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008091">https://doi.org/10.14945/00008091</a>

# サイコドラマと私

## —偶然の出会いが必然に—

磯田 雄二郎

### はじめに

本論は、「偶然の出会いが必然に」という副題をつけている。筆者には今でも記憶に残っている最終講義がある。東京大学医学部で病理学の教鞭をとっておられた所和夫教授の最終講義で、筆者が教養学部1年生のときの講義である。どんな素晴らしい話をされるのだろうか、どんな新しい治験を出してくれるだろうと張り切って詰めかけたところ、先生が持ってこられた風呂敷包みから出てきたのは驚いたことにメガネであった。三角のメガネ、四角のメガネ、丸いメガネ、星型のメガネ、あらゆる形のへんてこりんなメガネが出てきた。そして、先生がどのようにしてこれらのメガネを見つけ、どういうふうに作り上げたかという話が続いた。病理の教授であれば、どのように人間の細胞が病気になっていくのかという生物学的な話をするはずであるが、講義はとうとう最後までメガネの話で終わった。そして最後に先生は、普段できずにいた一番話したかった話を最終講義でできて良かったと言われ、帰られた。先生の普段の授業は全く憶えていないが、その授業だけは今でも鮮明に記憶に残っている。先生とメガネ、それは誰もが人生において必要とする必然の出会いであり、筆者にとってそれはサイコドラマとの出会いだったのではないかと考える。

### 異文化との出会い—映画『王様と私』

Margaret Landonが1944年に発表した小説“*Anna and the king of Siam*”（アナとシャム王）を原作として、1951年に初演されたRodgers & Hammersteinのミュージカル作品をアメリカで1956年にリメイクした『王様と私』（King and I）という有名な映画がある。この作品は1951年にGertrude LawrenceとYul Brynnerが演じ、映画ではDeborah KerrとYul Brynnerが演じている。映画のポスターに

は、タイの風習に従い裸足でダンスを踊るところが描かれている。女性は若き日のDeborah Kerr, 男性は、本名がYuliy Borisovich Brinerという、ロシアのウラジオストックの生まれのYul Brynnerである。この映画は、アカデミー作品賞、監督賞など9部門にノミネートされ、作品賞は逃したものの、Yul Brynnerがアカデミー主演男優賞を、衣装のIrene Sharaffはアカデミー衣装デザイン賞、美術のLyle R. Wheeler, John DeCuirらはアカデミー美術賞を、そしてミュージカル映画音楽賞、録音賞を含めて5部門でオスカーを獲得した名画の一つといえよう。

映画は、タイの王邸のラーマ4世に仕えたアンナ・ローランドンというイギリス人の女性が、王様を説得してタイ王室に民主主義を導入していく物語である。非常にエスノセントリックであり、西欧中心的な考え方であるという点で、現在では若干の問題が指摘されている。しかし、お互いに違ったものがぶつかりあっていくという視点や両者の葛藤、そして両者の間で様々な感情のうごめきが生じるというトランスカルチュラルな視点で捉えると、今でも非常に大きな意義をもつ映画であると言える。この物語は、ある意味、近代のアジア世界が一様に抱え込まなければいけなかった矛盾の表現であるとも考えられる。同様に、日本でも富国強兵が叫ばれた明治時代に、文部大臣の森有礼は、日本語をやめて英語を使用しなければ日本は世界に伍していけないと主張した。そうした矛盾がこの映画には表現されている。しかも、タイの伝統ではなく西欧のという点には違和感があるものの、それをダンスという非常に優雅な方法で乗り越えていくのである。この映画のポスターにはそうした希望が込められているとみることもできるだろう。先述したように、Deborah Kerrは靴で伝統的な長いドレスであるが、Yul Brynnerは裸足で伝統的な衣装を着こんでいる。ここには両者のぶつかり合いとお互いの理解、そして葛藤を乗り越えていく努力というものがみえてくるのである。

### サイコドラマと私

『王様と私』でアンナがラーマ4世と出会ったように、一人の引っ込み思案な日本人である筆者が、いかにして極めて表出的な方法論であるサイコドラマの実践者となったかということについて論じていきたい。サイコドラマは治療法の中でも非常に自己表現的な治療法という点が評価されている。サイコドラマと私の物語、それは本当に偶然の出会いから始まる。その偶然の出会いは、だ

んだんと必然となっていく過程として捉えることができるのではないだろうか。ある意味では、サイコドラマとの偶然の出会いを通じて、私という人間はアイデンティティを確立させていったともいえる。Erikson, E.H. (1902-1994) が提唱した自我同一性、アイデンティティの確立のために、サイコドラマに出会うべくして出会ったともいえる、

### サイコドラマの祖師Moreno, J.L.

ここでサイコドラマの歴史を簡単に紹介する。サイコドラマは、Moreno, J.L.によって開発された集団を利用した治療法である。Morenoは1889年5月8日に生まれ、亡くなったのも1974年の5月14日なので、かなり図ったようにして自分の人生を決めているところがあるように思われなくてもいい。集団精神療法の定義は集団の力動、あるいは心性を利用して、集団の成員の治療的な変化を目指すものであるとされている。

Morenoは、元来個人よりも集団に親近感をおぼえた人物であり、ウィーン大学在学中には、市内の公園で子どもを集めて、‘お話ごっこ’をしていた。これは、子どもたちの話をきいて、それをみんなで演じるというものであった。それだけではなく、売春婦の互助組合を組織することにも携わっていた。互助組合は、病気や妊娠、ときには強盗にあたり、客とトラブルのために殺されたりと、非常に多くの危険と隣り合わせの生活を送っていた彼女らが、互いに助け合っていくための組織であった。例えば、子どもがいれば母親がいなくなった後に生活していくための基金をつくる、といった活動を行っていた。彼の活動は、大正時代以降に日本に少しずつ広まり、筆者が学生時代に盛んに行われたセツルメント活動の先駆ともいえる。

当時のMorenoの肖像画が残っている。若き日のMoreno (図1)は顎がそげているが、後にはもっとふっくらとしてくる。顎がふっくらして楕円形の顔であったフロイトとは対照的である。彼は身長が192センチもあり、こんな風貌でウィーンの街中を闊歩しており、周囲が近寄りたがたい雰囲気であったろうことが想像される。図1は、カナダのサイコドラマティストであるMarineau, R.の著書“*Jacob Levy Moreno 1889-1974*” (Marineau, R., 1989)に収録された若き日のMorenoのスケッチである。これは有名なスケッチで、後年のMorenoと比べると、同一人物とは思えないほど風貌が異なっている。図2・図3は、Morenoの著書の扉絵の裏側に掲載されている彼自身の写真である。年齢を重ねて頭髮

は薄くなってきているが、鋭い顎のラインは若き日のMorenoを思わせる。

Morenoについては映像も残されており、インターネット上ではサイコドラマを行っている彼の姿を観ることができる (<https://www.youtube.com/watch?v=zvgnOVfLn4k>)。サイコドラマで母親に会いに行ったストーリーを演じているところである。その中で注目すべきは、何度も彼が「サイコドラマだから」と繰り返し語っている点である。これは現実の世界ではなく、あなたのサイコドラマであるということを強調しているのである。さらに、彼が非常にディレクティブに関わっている点である。映像では、Morenoが参加者に有無を言わずに演じさせていることが窺える。私たちは、現在ではMorenoのようにディレクティブに関わることはない。Morenoがそれほどディレクティブに関わったことがどういう意味をもっていたかということについては、もちろん私たちがさらに検証していかなければならないが、そうした議論とは別に、この映像を観るとMorenoという人物の人となりがよく伝わってくる。

### サイコドラマの誕生—ジョルジュとバルバラ

Morenoがサイコドラマを始めた根拠は、“*Essential Moreno*” (Fox,J.,1987) の中に収録されたMorenoの自伝に出てくるジョルジュとバルバラのエピソードとしてよく知られている。このエピソードは、Morenoの助手であったジョルジュが、当時看板スターであったバルバラという非常に清楚な美人と恋に落ち、ついに結婚することで始まる。ところがバルバラは実生活ではとてもヒステリックな女性であったため、ジョルジュは悩み、Morenoのところに相談に訪れる。Morenoは、ある時、新聞に載っていた汚れ役で、お金の問題で対立して客に殺される娼婦という役をバルバラに演じさせる。その日、バルバラは普段演じないような嫌な役を演じてカリカリして、また八つ当たりされるのではないかと、帰宅したジョルジュはとても心配をしていた。ところが、彼女が怒りや悲しみといったネガティブな感情を舞台の上で表現すればするほど、実生活では落ち着いていった。それを見たMorenoは、今度はバルバラにジョルジュとの夫婦関係の問題をみんなの前で演じることを提案した。すると、驚いたことに実生活での夫婦関係の問題は解消して、仲良くなっていった。それだけではなく、興行的にも大成功となった。約60人収容できる劇場に、これまでは十数人しか入らなかったにも関わらず、そのときは90人もの観客が入ったといわれている。人間というのは他人の秘密、スキャンダラスな面を探りたくなるという癖があ

るように思われる。マスコミでスキャンダルをあれほど多く取り上げることは、そうした人間の心理が関係しているのかもしれない。ここで重要なことは、ただスキャンダルを演じたということではなく、そういうことを人前で演じることに意味があったという考え方である。そこに、実は治療的な重要な意味があるというのがサイコドラマの最も基本的な理念となっている。

## 私という人間がサイコドラマに出会うまで

ここで、サイコドラマと出会った私という人間について述べる。1948年8月29日、豊橋と田原の中ほどに位置する愛知県渥美郡杉山村（現在の豊橋市杉山町）で生を受ける。当時は家庭出産が当たり前で、助産師に取りあげられた。両親も助産師も子どもは一人だと思い込んでいたらしくて、母親が一人生んでホッとしていたところに、助産師からもう一人いると言われて大騒ぎになったそうである。一人であれば男の子の名前も女の子の名前もきちんと考えていたが、一人ではなく二人だったために、壮一郎と雄二郎という、頭に輩行（順番を示す言葉）をつけるというとても安易なやり方で名前を決めた、と母親自身が語っていた。中学生の頃には、「あんたら一人の予定が二人生まれたものだから、おむつが足りなくて困ったよ」と母親がよく言うのを耳にしていた。

こうして、筆者は父圭二、母あさの間に一卵性双生児の第二子として出生した。父親は婿養子であり、筆者の代まで四代、女兒ばかりが誕生してきた家系であった。初めて男児が、しかも二人も生まれたのである。祖父にしてみればよくやったということになるのだろう。筆者は祖父から、「この家の竈の下の灰までお前たち二人のものだから」とよく言われたものである。

幼稚園時代のエピソードとして、よく母親が語っていたことがある。母親は、豊橋女子師範（現在の愛知教育大学）で幼児教育を学んだ、とても頭のいい人であった。そのため、幼児教育について素養があり、子どもはほめて育てなければだめであるなど、色々なことをよく言っていた。しかし、実際には幼稚園児の筆者に100までの順唱と逆唱をやらせていたようで、随分教育熱心だったようである。そんなとき、兄は1から100まで、100から1まで、前に出てやるのに、筆者は引っ込み思案で、兄の後ろの見えないところで、何もしないている。そんな筆者をみて母親は、この子は頭が悪いのかなと心配していたが、問題を出してみるときちんと答えるので安心したそうである。こんな風に比較されるので、兄弟というのは大変なものである。

小学校に入学し、筆者の人見知りは一層強くなった。小学校3年生のときにはクラスで不適応を起こし、1週間に渡り不登校となった。この経験から、不登校になっても短期間であれば大丈夫であると、自分の経験を基にして自信をもって言える。このときの記憶はしっかり残っている。すったもんだの末に、担任教師がよく働きかけをしてくれて無事クラスに戻ることができた。その頃の筆者は、どうも担任からいつも目をつけられている子どもであったように思う。掃除当番をせずに叱られたり、授業をまじめに受けないと文句を言われたりすることがあった。授業中には外ばかり見ていたそうである。こうした筆者の態度について、授業参観のときに担任が母親に文句を言ったところ、「あの子はずっと先まで勉強しているので、先生の言うことが分かって、つまらないから外を見ているんだと思います」と返したとのことで、母親もすごい人である。筆者自身もよく憶えているが、小学校低学年の頃のいい思い出はない。

小学校4年で、父親の仕事関係もあり横浜に転居、小学校も転校することとなる。横浜で高校まで過ごしたと言うと、元町や港の見える丘公園があっただけですわねと言われることが多いが、筆者が住んでいた横浜は二俣川という自動車学校のある所で、山の奥であった。相模鉄道という砂利鉄道があり、その沿線でも何も華やかな所はなかった。伊勢佐木町にも30分以上かけて出るしかない。周りは雑木林ばかりであったため、それまでは経験のなかったカブトムシの採り方だけは熟達した。

ここでは片道30分前後の雑木林の中を徒歩で通学することになった。兄は非常に社交性があり、自力で友だちを作り、登校していたが、筆者はそれができないでいた。この時だけはとても焦り、寂しさ、心細さで必死になった。たまたま転校してきたすぐ近くの団地に住んでいる同級生の男の子になんとか声をかけ、一緒に帰ることになり、ホッとしたことを憶えている。この体験を通して、この頃からようやく人前に出ることをためらわなくなった。とにかく世の中というのは自分でやらなければ何も変わらない、ということを経験せざるを得なかった。しかし、自分の都合で人とくっついたり、離れたりする癖は変わらず、友だちがほしいときには友だちのところに行くが、自分が本を読んでいるときは知らん顔しているというようなところもあり、あまりいい性格とはいえない小学生であった。

中学校は近所の公立学校で軟式テニスに熱中し、高校は同じく近在の県立希望ヶ丘高校に進学した。電車に乗るのが面倒くさくて、ほとんど毎日1時間くらい歩いて通学した。医学部への進学を希望しており、受験勉強に専念するた

めに運動部をあきらめて文芸部に所属し、部長も務めた。筆者の代から、文芸部の伝統として文化祭で演劇をするようになった。筆者としては、特に演劇をということではなく、とにかく人目を惹くことをやってみたいという一心であった。また、校長が男女共学でありながら男女別クラス制をとると言いだしたことに大反対し、抗議運動を組織したことも、高校時代の記憶に残るエピソードである。この時は兄弟と一緒に運動し、二人が手を組むととんでもないことが起きると両親も教師もみんな共通して思っていたようである。

1967年に東大理科Ⅲ類に入学、駒場の教養学部のキャンパスに通うことになる。入学後、1年半で学部封鎖が行われて、東大は東大闘争に突入していった。そのきっかけは、粒良事件といわれる事件であった。熊本に宣伝活動に出かけていた粒良という東大医学部の自治会学生が、学部長を殴ったという理由で退学になる。しかし、その後学部長が殴られた時、彼はその場所にいなかったことが明らかになった。この時、彼の足取りを調べたのが、水俣病研究で有名な高橋暁正と原田健一であった。二人は現地熊本へ赴き、彼の足取りを詳しく調査し、東大医学部の教授会に彼の冤罪を主張したが、教授会はこれに取り合わなかった。これが騒動となり、学部封鎖、東大闘争へと突入していく。

これに筆者も大きく関わっていくこととなる。筆者のクラスはクラス討論を経てストライキを可決し、断固闘争に入った。このとき筆者は、いない人間が処分されるということは論理に合わない、論理的でなければならない医学部でなぜ非論理的なことが通ってしまうのかと、教授会の判断に強く反対を主張した。自宅でも、これはおかしいと、兄や両親と激論したことを今でも憶えている。みんな、おかしいのに仕方ないと言う。筆者は、おかしい処分をしたのであれば処分を撤回すればいいだけの話であり、学部長を殴った人間は別にいるのだから、それはまた別に判定すればいいだけだと主張する。しかし、両親も兄も意見が異なるので、よく大喧嘩になったものである。

こうした闘争の高揚も1969年に終わりを迎える。特に法学部、ここには筆者の兄も先頭に立っていたが、法学部が卒業できないと国家の一大損失であるとされ、正常化が図られた。そうした中、筆者のクラスだけは最後まで闘争態勢を解くことはなく、授業粉碎闘争を続けた。当時、筆者はクラスの自治会委員であったこともあるが、そのためにある雑誌に遅れてきた全共闘と揶揄されたこともある。結局、最終的には全クラス正常化し、筆者も闘争を続けてもどうしようもないということで勉強に復帰した。その後は、テニスと社会活動にほとんどの時間を費やした。午前は授業に出て午後は実習、その後は午後3時く



らいからテニスをする。もちろんナイター設備などなく、夕方日が沈むまでテニスをして、それから家へ帰ってまた勉強するという忙しい生活であった。社会活動としては、前出の高橋暁正氏の指導の下に、筆者ら4人の仲間で、サリドマイド被害者の支援のための医療研究会を立ち上げた。この活動を通じて、親友と言える友だちを得た。一人は小児科、一人は整形外科、筆者は精神科、もう一人は内科へとそれぞれの道を選択した。

### 精神科の選択、そしてサイコドラマとの出会い

当時のクラスメートたちは筆者が精神科を選択したことを意外に思ったようである。当時、精神科と小児科が一番闘争が激しかったところで、医局も闘争態勢にあったため、運動と関わり続けるならこのいずれかしか選択肢はないとされていた。つまり、いずれかを選ぶということは、ある意味運動を続けるということであった。筆者自身としては不思議はないが、周りからすると不思議だったようである。また、筆者は高校卒業前頃から脳に興味をもち、研究をしたいと思っていた。在学中に小脳の研究者で後に文化功労者となられた伊藤正男先生の下で小脳の研究をさせてもらえたことが大学に入学して一番の幸せであったといっても過言ではない。もし脳研や神経内科に進んでいたら、脳の研究を続けていただろう。

このようにして精神科で医師としての道を歩むことになった。研修医の1年目、週に1日、三浦三崎にある初声荘病院にアルバイトとして行くことになった。そして、この病院の副院長だったのが増野肇先生である。

増野先生は、東京の開業医のお子さんとして出生される。しかし、お父様が開業医として夜遅くまで働く姿をみて、自分はあんなふうには働くのは嫌だと思ったそうである。お母様はクリニックを継いでほしいと思われていたようであるが、結局は千葉大学文学部英文学科に入学する。高校の頃から演劇が大好きで、演劇をやろうと、演劇をやるならやはりシェイクスピアだろう、シェイクスピアやるなら英文学だろうと考えてのことであり、入学後は劇団に入団し、演劇活動に打ち込んでいたそうである。ところが、在学中にお父様が急逝され、お母様からのかなり強い説得により医師になるという決心をされて慈恵医科大学に再入学し、医師になられた。

若い頃、増野先生はアルバイトで多摩川病院に行っておられ、そこで自殺の研究で有名な大原健士郎先生と出会う。大原先生は様々な論文を読んでおられ、

その中にMorenoの論文を見つけられ、「増野くん、増野くん、そういえば君、演劇に興味があると言っていたね」と、増野先生にサイコドラマを紹介し、論文を渡されたそうである。それから増野先生はサイコドラマに夢中になっていく。30代に入って初声荘病院の創立者である福井東一先生と出会い、副院長に就任された増野先生は、そこでサイコドラマを始める。

筆者は、最初からサイコドラマに興味があったわけではなかった。筆者とサイコドラマとの出会いは、初声荘病院での初めての当直の日であった。副院長の増野先生から「今日は当直だよね、君、じゃあ暇だね」と声をかけられた。この病院での当直は初めてであり、忙しいのかそうでないのかもわからない筆者は、「いや、僕、ちょっと当直なもので、忙しいかどうかかわからないです」と応えると、「暇、暇。大丈夫。だから今日、僕がサイコドラマというのをやるから出ないか」と誘われた。そのときはサイコドラマではなく、心理劇と言われていた。筆者もわりとミーハーなところがあり、何でも声をかけられるとすぐ飛びつく悪い癖がある。「ハイハイ、わかりました、お役に立てるなら」と参加することにした。サイコドラマも心理劇も何も知らないままに参加した。ちょうど舞台が始まり、主役の方がお父さんに外泊をしたいとお願いする場面だった。Morenoと同じで、増野先生が「じゃあ、磯田先生、お父さんをやってください」と言われた。サイコドラマを何も知らない、何をやっていいのかわからない、何が起きるのかわからない、そんな人を引っ張り出してきて父親役をやりなさいと言われる。しかも、筆者はこの主役になっている方のご家族に会ったことも一度もない。何がなんだかわからない、急に外泊したいと言われてもどう応えていいのかわからない状況の中に放り込まれてしまった。こんな風にして、サイコドラマに毎週のように参加することになった。時々看護師やソーシャルワーカーとケースの議論する方が楽しく、さぼったりもしたが。ただその時は、誘われたからとサイコドラマに参加し、面白いことは面白いけれど、正直自分のライフワークにしようとは全く思わなかった。それでもなぜ参加したのかと言うと、この増野肇という人に惚れたからである、面白い人だなと。増野先生には、Fromm-Reichmann,F.やいわゆる対人関係学派と呼ばれる人たちの本を紹介していただくなど、たくさんのことを教えていただいた。増野先生についていくつもりで、サイコドラマに参加し続けたのである。そのため、アルバイトを辞めるときも、慈恵医科大学に増野先生の研究会にご一緒させていただきとお願いに行った。「じゃあ、サイコドラマの研究会を月に1回慈恵でやってるから来る？」と言ってもらえたので、「ハイ、行きます」と言って参加

し始めた。そして、筆者もまた夢中になっていったのである。

### サイコドラマとの出会いの意味

サイコドラマに夢中になり分かったことは、サイコドラマをやることで、「私は私の自由度を高めて、私というものを解放し、対人緊張から解き放たれていった」ということである。海外へ出て外国の人とディスカッションし、英語で喋り、ついには英語でサイコドラマをディレクションするようになった。こんな風になるなど自分でも考えたこともなかった。英語は様々な理由があって自信があったものの、ディレクションやるなどとても怖くてできなかったはずであるが、それができるようになった。ディスカッションもできるようになった。そして最後にはニュージーランドまで行き、オーストラリア・ニュージーランド・サイコドラマ協会で試験を受けて、サイコドラマティストの資格を取得した。自分自身の能力が外国にいくたびにわかるのである。自分の能力をいかに発揮し、発揮されて、私というものが開いていくかというのがわかるのである。

つまり、サイコドラマと私の出会いは偶然であったが、私にとってはサイコドラマが私を選んでくれたという感覚なのである。私がサイコドラマを選んだのではない。むしろサイコドラマの神様が私を選んでくれたのである。つまり、最初の出会いが偶然であったとしても、それを深く追求することによって、人は自分の人生と出会うことができるようになる。ここで述べたいことは、一つのことをコツコツやっていくことこそが、実はその人があることによって選ばれる一番の証拠になるということである。諦めず、たとえそれが少数派であっても、それをコツコツやり続けることによって人は自分の人生というものを発見することができるのではないかということである。そう考えると、所先生にとってのメガネの意味が浮かび上がってくるのである。所先生はメガネに選ばれたのである。筆者はメガネに選ばれるということも素敵なことだと思う。それは必ずしも生活の糧とならなくてもいいのである。そのことで、その人が、自分が自分だというアイデンティティを見出すことができたとしたら、それは素晴らしいことだと思うのである。私はたまたまサイコドラマという技法に出会い、サイコドラマに選んでいただいた。筆者はサイコドラマの神様にいつも心から感謝を捧げている。

## おわりに

振り返ると、静岡大学へ赴任するのが決まったとき、筆者が師事し、筆者をオーストラリア・ニュージーランド・サイコドラマ協会の正会員として受け入れてくれたMax Clayton氏に話をした、今度フィールドを変えて、臨床からむしろ教育の方を仕事の場所にしようと思うと。彼は、それはお前にとって素晴らしいこと、お前は新しい可能性を拓くのだと言ってくれた。その言葉は今でも私を支えてくれている。これからは再び臨床の場に戻っていくことになるが、私の新しさ、新しい可能性がさらに拓けてくればと願っている。そして、静岡大学の学生の皆様にとっても同じことを願っている。皆様にとっても新しい可能性が拓けてくること、それを期待したい。

## 引用文献

- Fox, J. (1987). *The Essential Moreno: Writings on Psychodrama, Group Method, and Spontaneity*. New York. Springer Pub Co. (磯田雄二郎 (監訳) (2000). エssenシャル・モレノ—自発性, サイコドラマ, そして集団精神療法へ金剛出版)
- Marineau, R.F. (1989). *Jacob Levy Moreno, 1889-1974: Father of Psychodrama, Sociometry, and Group Psychotherapy (International Library of Group Psychotherapy and Group Processes)*. New York. Routledge.



図1 若き日のMoreno



図2 後年のMoreno



図3 後年のMoreno